

和紙

だより

越前和紙への提言



■ 渡邊公生

環境建築家。NPO法人・日本バウビロギー協会理事長。

(株)ケイ・ワタナベ一級建築士事務所代表取締役。

2003年、日本で初めて「NPO法人・日本バウビロギー協会」を立ち上げ、研究会、学習会、建築アドヴァイスなどを行っている。

<http://www.baubi.org/>

■ 渡邊公生さん（環境建築家）
「バウビロギーの視点から和紙を」

● バウビロギーとは？

バウビロギーという言葉は日本語では「建築生態学」と訳していますが、Bio建築、広くは環境、宇宙を含む全体、Bio生物、生命、生理、精神、感覚、感情、Logic学問、理性という意味で「人工的な構造物と生体とを地球の自然環境と結びつける体系や学問」ということです。バウビロギーという言葉自体は百年も前からドイツやスイスであり、建築手法として概論みないなものもありました。日本の大工さんや職人さんだっこのような手法は当然持っていました。職人の世界では「技術は親方から盗め」が基本でしたから、学問の体系にはしづらかったのでしょうか。自然素材を使い、環境にも付加の少なかった時代の建築物が何故、何に、どこがいいのかを学問としてまとめ上げたのです。京都にも次の世代や消費者に伝えるべき情報は沢山蓄積されているのですが、形として残っていても体系的に人と地球の相互作用をよく考慮し、バランスを考えた建築手法や材料の話が科学的に語られてはいません。私はもともと職人ですが、高度成長期に材料の多くが木からプラスチックや化学のものに変化してきて「何かおかしい、人間の身体にとってこんな家でないのだからか」と疑問を持っていた時期に偶然出会ったのが「バウビロギー」という言葉だったのです。「自分の考えていたことはこれだ！」と感じました。

● 建物は第三の皮膚である

二〇〇三年に、日本で初めて「日本バウビロギー協会」をNPO法人として設立しました。バウビロギー二十五の原則というのがあります。どれも少し環境に関わっている人から見れば、ごく当たり前のことがあげられています。幹線道路のそばには住宅を建てない、とか地元で供給できる素材を使うとか、エネルギーの効率をよくするとか、部材などが時代と共になくなるのではなくいつでも使えるシンプルな材料を使うなどです。

全体的なコンセプトのひとつに「建物は第三の皮膚である」という言葉があり、これはバウビロギーを特徴づけている概念だと思っています。人間の皮膚は、身体の内と外を分け、身体を守り、内と外の循環を担う第一の器官です。これと同じように建物は、雨、風、太陽、電磁波、ホコリなどから人間を守るプロテクターであると同時に、呼吸し外界の空気や太陽光などを取り入れるものでもあるのです。つまり、家を人間と同じように生き物として捉えるわけです。生きている人間と生きている建物のいい関係を環境や生態学的視点から総合的に考えていくのです。

● 「快適」の意味を考える

建築という分野は今まで案外「人」を見てこなかったと言えるでしょう。目新しいデザインや都市計画に目を奪われ、例えば「快適性」「健康」などを深く考えてこなかったと思います。エアコンを利かせて部屋の快適性を維持し、高気密にしてエネルギー効率をよくするといった方向は、ともすると人間の本来持っている機能を退化させ悪循環を招くのです。よい例が、最近「低体温症」の子供が増えています。平熱が三十五度くらいしかないのです。こういう子は生まれたときからエアコンのある部屋で育ち、エネルギーを燃やさなくてもよい環境に慣れていますので、外界の環境に合わせてうまく体温調節ができず、暑さにも弱ければ、寒さにも弱いのです。基礎代謝量が低いですから肥満にもなりやすい。順応の能力が弱く、人間の身体というものはすぐ慣れてしまいますから、暑ければ少しの汗もいやがり、また余計に室温を下げようと悪循環を繰り返していくのです。それにつれてエネルギーも多く使います。こういったことは建築のあらゆる面で見直されなければなりませんし、ある意味で建築がうたってきたことへの自己否定も含まれるのです。

● 和紙の相互的作用を研究してください

建築の材料は化学物質の固まりといっても過言ではないでしょう。何しろ世の中にある物質・三千万種類の化学物質のうち、影響が解明されているのはそのうちのたった0.5%です。和紙の建築材料としての可能性は大いにいい面があると思いますが、それを総合的にしかも科学的に説得性のある材料にしていかななくてはなりません。とかく、ある素材がいいという一方方向だけの視点で、あたかも万能であるかのような訴え方をしますが、バウビロギストはそうは考えません。どの素材にも利点・弱点があり、使用するときの組み合わせや加工法で良くも悪くもなるのです。例えば、畳は呼吸する素材で作られていて、畳そのものはいいいのですが、マンションや合板の板の上に設置すると呼吸が全くできず、畳本来の利点を殺してしまうこととなります。だから科学畳が受けるようになったわけです。同じように和紙もアルミやプラスチックの板に貼っては本来の良さは活かされなればかりか、シックハウスの原因にもなりかねません。和紙には手漉き独特のチリもあり、色むらもあって知識のない建築家にはそれが欠点と思われる

るかもしれませんが。しかし例えば望ましい襖の構造、望ましい壁紙の貼り方、はたまた和紙の光は鎮静作用があり精神的にも良いなど相互作用を科学的に研究した上で「和紙を使ってください」というのであれば、納得します。全体的には100%ではないが、60、70%の所でも、今より身体によいのであれば進歩したことになります。

●共同研究の可能性も

実際の所、建築家は自然素材の性質や使い方を余り知りません。世界的に有名な建築家でも「木は怖くて使えない」とおっしゃるそうです。時間を経てどうなるのか想像が付かないからだと思います。それほど現代の建築家はレディメイドの部材に慣らされてしまっているのでしょうか。日本バウビロギー協会ではバウビロギーの視点から、エコハウジングの学習会、アドバイザーシステム、エコハウスの計画立案・実施、環境研修会、プロの方向けの環境建築士講座、室内環境のテストなどを行っていますし、京都のエコロジーセンターには選定した建築素材も常設展示し、市民の相談にも乗っています。現在、大学生や専門家に読んでいただける教科書も出版予定です。その中の一章に「和紙」の項目があってもいいかもしれませんね。我々バウビロギストと産地の皆さんと一緒に環境時代の和紙がどうあればよいかの研究会を持つてもいいと思います。大変地道な作業なのですが、きちんとした科学的データと使い方のノウハウや建築家への情報提供のネタを蓄積することは、これから重要になってくると思います。

渡邊氏のアトリエと
なっている「日本バウビロギー協会」事務局。
「えこはうす」の看板が見える



■中部ICネット(名古屋市区)

「表具屋さんのネットワークで
ビジネスチャンスを増やす」



■理事長の石田昌弘さん

●襖の需要の現状

少し前までは表具屋さんには、インテリアアコーデイナーの役割も果たし、出入りの家の座敷まで上げてもらい、お客との話し合いで襖や家のしつらえに適切なアドヴァイスを与え、ものを納めていた。旅館などのおかかえ表具屋さんも同様である。信頼関係のある長年のお付き合いだからこそ成り立ってきた商売だったのだ。しかし、今日では住宅の洋風化に伴って日本間が少なくなり襖の需要が落ち込んだ上、襖の張り替えや新築需要の経路もハウスメーカー、デイベロップパーなどを通して行われるため、地域の表具屋は下請け、孫請け、もしくはその経路からはずされてしまうという状況が日常化している。すなわちエンドユーザーから遠い存在になってしまえば、和紙の知識を始め、建具の知識とセンスを活かせなくなり仕事も激減した。また、エンドユーザーにとってみれば、襖や障子の張り替えをどこに頼んだらいいか分からない、値段も分からない、シックハウスが心配なお客やアレルギーの子供を抱えるお客が相談する所

がない、インテリアにこだわりを持つているお客に洒落た襖を供給するような所もないといった状況なのだ。

●地域のネットワークを活かす

このような事態に、平成十一年八月、名古屋周辺地域の表具関連業者を結ぶネットワークとして「中部ICネット・中部Interior Construction Network インテリア施工ネットワーク」は創設された。事務局になっているのは「柏弥紙店」、長年越前和紙を始めとする和紙を取り扱ってきた紙問屋である。理事長の尾関昌弘さんは、このネットワークの目的を「技術は持っているが、PR力や営業力のない表具屋さんのビジネスチャンスを増やすこと。それがしは和紙の商いにも還ってくる」と語る。

●提案商品の開発

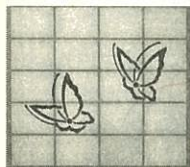
「eふすま」と「ニュー襖」

PRは、出来ることからということでもまずホームページを立ち上げた。結局エンドユーザーに一番近くなることこそ早道だと考えたからだ。目下、力を入れているのが環境と健康に優しい「eふすま」と襖の技術と障子の良さを活かした「ニュー襖」の提案だ。

「eふすま」は天然素材だけを使用し、和ふすまの呼吸する機能を残しつつ、調湿機能、化学物質、紫外線をカット、ダニやホコリを吸着する機能をうたつたものだ。襖の効果も科学的データで示し、住宅の健康ニーズに応えようとしている。地元環境団体を通じてグリーンコンシューマー運動にも一役かっている。「ニュー襖」には「透かし襖」と「きり絵襖」がある。「透かし襖」はいわば襖と障子を合わせたもの。下張り紙を絵柄に切り抜き、白い和紙で下張りをして、袋張りの上張りをして仕上げた襖は、切り抜かれた絵柄の部分だけが光を通し、ほのかなシルエットが楽しめる。「きり絵襖」はCADと自動制御の裁断機を取り入れたシステムにより、複雑で繊細なパターンの切り絵を貼ることが出来る。いずれも特注を含めた自由度の高いデザインをこれらの技術で可能にしており、



透かし襖



きり絵襖

小ロットにも対応できる。裁断加工は東京で行い、加工された紙は加盟店でサイズなどに合わせ貼り、現場で施工する。

●客層の掘り起こし

「昔は、家の中でエンターテイメント性を表現するのは、襖絵があつたり床の間がある座敷だつたと思います。高度成長からの洋風化とともに、家人の趣味を表す部屋が、居間になり、キッチンになり、オーディオルームになり、現在ではバスルームやガーデニングスペースなどに変化してきています。しかし、日本人のDNAに刻まれているとも言える和のテイストは自然素材の癒し効果や柔らかな風合いは今や国際的なものでもあり、和室をもう一度エンターテイメント性が表現できる空間に再構築していくことが望まれているのではないのでしょうか」と小関さんは語る。確かにシステムキッチンに何百万もつぎ込むより、趣味のいい襖四、五枚の方が割安でインテリアのランクもぐっと上がる。当ネットでは、その他にもNTT・ネオメートルサービス東海や愛知県労働者福祉基金協会、ハートフルセンターと提携し、襖の張り替え需要やリフォーム需要のチャンスを増やす努力をしている。電話の取り付けや住宅部門の相談に関わるこれらの組織には、ビジネスのチャンスがまだまだあるという。

をコツコツ掴んでいこうと考えています」と小関さんは抱負を語ってくれた。

漉き場探訪

■長田和也さん (株)長田製紙所

長田製紙所は従業員十人。小規模ながら越前伝統の襖紙を永年制作してきているが、手漉きの特注品には定評がある。お話を伺った和也氏と、母・栄子さんの和紙の照明器具作品は、紙そのものにこだわったこの漉き場ならではの、和紙の存在感を再確認させられるものだ。



■長田和也さん

●ふすま紙をはじめ四代目

長田製紙所では現在、ふすま紙を中心に手漉きによる生産していますが、ふすま紙を作りはじめたのはそれほど古いことではなく、私から数えて四代前のことのようにです。それ以前は、紙漉きは一家を支えるに十分な仕事ではなく、主に女性が紙を漉き、男性は外へ働きに出ました。我が家では三代前まで石垣積みや建築の仕事をしていたようで、そのことが岡本村史にもでています。

●三代前は偉大な工夫の人
それ以前にはどんな紙を漉いていたのか、資料もありませんが、三代前、つまり私の祖父が漉いた紙は残っています。昭和十五年のふすま紙の見本帳を見て驚くのは、この時すでに現在の手漉きふすま紙の製造に使われている技術のほとんどが開発されていることです。例えば「ひっかけ」という技術は今でも使いますし、機械漉きでも使われます。その技術がすでにこの見本帳にあるのです。

これを見てみると、私たちは昔の人たちが工夫した技法をちよつとアレンジしているだけで、全然新しいことをやっていないことに気づかされます。この見本帳の中には、どうやって作ったのか解らないものもいくつかあります。その再現を考えていると、どんな工夫のアイデアが湧いてきます。そうした意味でも見本帳はアイデアの宝庫なのです。

●手漉きへのこだわり

これは昭和三十五年の見本帳です。祖父は昭和三十三年に亡くなりましたので、生前の仕事をまとめた最後の見本帳ということになるでしょう。その中に作業場の写真もあり、建物は今と変わっていません。ただここには紙を漉く「ふね」が三つ写っています。最盛期には五つの舟を使い、三十人の職人さんが働いていたそうです。現在はひと舟十人でやっています。

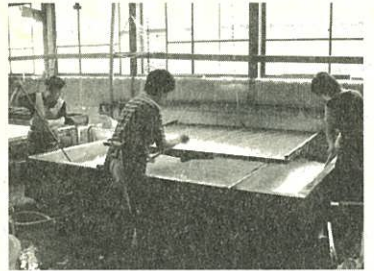
昭和三十年代は生産量が非常に多く、工夫を凝らした紙は比較的少なかったようです。その後だんだんと模様の入ったものが多く出るようになりましたが、生産量は少なくなりました。今立ても機械漉きに移行するところも増えましたが、越前の機械漉きは基本的に手漉きでできることを機械に移したものです。しかし手漉きでしかできないことも多くあり、うちではそれ

にこだわってやってきました。

紙の見本帳



漉き場



●紙の個性を感じ取ってほしい
手漉きの核心は、センスです。感覚的に「これは良い」「これは面白い」と瞬間的に判断して繊維や紙料を置いていく。これは機械にできないことで、自然にまかせた水の流れや楮の造形に対する感覚を信じて作るのですから同じものはいけません。良いものをつくってやろうと努力する過程で、いろいろ工夫します。紙もほとんど変わっていきません。それが手漉きのもつ個性と面白さだと思うのです。

紙を見る人、使う人には、是非一枚一枚の紙の個性を感じ取ってほしいと思うのですが、最近では、和紙関係者の中にもちゃんと紙を見なくなったり、紙を粗末に扱う人がいるように感じられて残念です。例えば自然素材の証とも言えるごく小さなチリを見本と違うからといって、乱雑に鉛筆で印を付けて戻してきたりするのは、親切のつもりでされることでしょうか、おかげでせっかく漉いた紙は原料に戻すか破棄しなくてはなりません。販売される方は、知識・情報の不足から必要以上に神経質になりすぎているのではないのでしょうか。かえって素人のお客さんの方が紙への愛着があり、よく見ているような気がします。

●紙そのものを評価してもらうために

問屋さんや表具屋さん、経師屋さんなどプロの中にも紙のことをきちんと知って、生産の現場も見て、ユーザーの方にきちんと紙のことを伝えられる人が少なくなりつつあります。

もちろん、見本帳の更新もなかなかできずにいつまでも古い柄を作り続けて、現代に合った柄を作れないなどの問題もありますが、中間業者さんは単に貼りやすくクレームの出ない紙だけを求めるのではなく、本当はその紙を選んでいただいたお客さんや職人さんの評価を大切にしたいです。そして手漉ぎの襖でしか味わえない風合いを体験していただきたいと願っています。

例えば、使っていた方からのご紹介で訪ねて来られる方がいます。そこで、見本帳ではなく現物をお見せすると、「こんな紙は見たことがない」とおっしゃるのですが、実は見本帳にも載っている紙だったりします。現物に触れてもらい、きちんと説明すれば、その価値は解っていただけなのです。

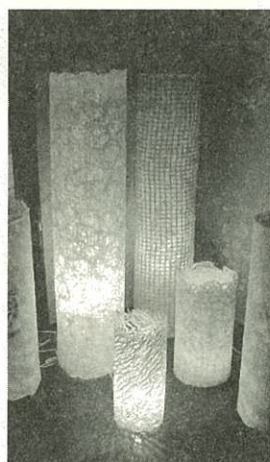
●紙の特性に正直に

紙の特性というのをきちんと考えて活かすことも大切だと思います。和紙は長い繊維がそのまま漉き込まれているので、リサイクルできる素材です。いろんな他の素材と混合・複合するとリサイクルが難しくなります。また紙は最後には燃やせばエネルギーになります。純粋な紙なら有害なものは一切出ません。

よく「和紙は千年もつ」と言われますが、私は和紙の寿命は一般的には十年だと思っています。千年もつのは特殊な環境下だけです。以前はふすまは十年で張替え、使う人は十年歳をとり、ふすまを替えて気分が変わり、古い紙はリサイ

クルされる。それが「ものと人との循環」を演じていました。

最近はやりの「リフォーム番組」では、ふすまはまず壊されます。でもふすまを壊してビニールの壁紙を貼った家が、湿度の高いこの国の氣候に合っているはずありません。和紙には物理的にも精神的にも、この国の風土に合った素晴らしい特性があることを忘れていただきたくないと思います。



和紙の照明器具

●照明器具作りから学ぶこと

和紙の照明器具を作っていますが、照明器具は紙そのものの質感や技法、風合いなどが際立つアイテムです。技術や手法についても研究を重ねますが、本物の素材にもこだわりたいのです。今は苛性ソーダを使っているところもありますが、やはり伝統技法で作ったものは実物の存在感が違います。

一方で「売る仕組み」も考えなくてはいけません。これまでもいろんなことにチャレンジしてきましたし、和紙で「こんなものも作れる」というものを見せていきたいと思っています。東京の企画会社と共同で、店舗の内装を提案したケースでは、一日に二十本も問い合わせの電話がありました。やり方次第でマーケットはまだまだ広がると思います。

照明器具は最初、球体のガラス照明器具を見ていて、もつと季節に応じて変化を楽しめる灯りがあったらいいのではないかと思って作ってみ

たのです。紙で包んでみたら？、アクリルで骨組みをつくったら？など、いろいろな工夫して今の形が出てきたのですが、どうしても中身（電球や骨組み）が紙よりも高くなる。そこで紙のシェードが磁石で簡単に取り外しができるようにしました。季節や気分により紙を替えて楽しめます。紙はひろげてしまつておけるので場所もとりません。

照明器具メーカーなどからも話がありますが、量産すると価格の折り合いがつかず、現在は少しずつ注文に応じて作っています。その分、どんどん新しいものを作っていますが、新しいものができ過ぎてカタログを作る暇がないのが悩みです。

●現場と現物を見ることから

私はこれからは紙漉に誇りを持って良い紙を漉くように努力します。こんな紙ができます、こんな風に使ってみてはどうですか、とも投げかけたいと思います。だから、問屋さんにはその紙の価値を感じ取って伝えてほしいし、経師屋さんや表具屋さんにはこの紙を活かそうという思いで貼ってほしい。

そのためには、たくさん情報をやりとりする必要がありそうです。インターネットも役に立つでしょう。でも、最後はやはり現場と現物です。是非、うちの作業場へ来て、仕事ぶりと紙ができる現場を見て、漉き上った紙を直接その目で見てほしいと思います。

そうした直接の体験とコミュニケーションから新しい創造が生まれるはずなんです。現に、何度も作業場へ足を運んでくれるデザイナーさんとは、今や送ってくる落書きのようなスケッチを見ただけで、彼がどんな紙を求めているかが解るようになってきました。

情報欄

●イベント情報

11/3～11/7 伝統産業月間福島大会 福島県会津若松市

11/14～11/28 2004今立現代美術紙展 いまだて芸術館

H17.1/27～2/1 福井県の物産と観光展 京王百貨店 7F 東京新宿

●次号予告

KIMA

ハイセンスな和のインテリア感覚で襖を提案する東京目黒のお店を紹介しします。

編集後記

商いのチャンスを作るには、コミュニケーションからとよく言われますが、整理された情報でなくとも、ふとした情報のやりとりがやがて熟成されて実になる時がよくあるものです。この1年多くの方々の取材を通して、ヒントを沢山頂きました。

ありがとうございました。(よ)